

英日翻訳の多次元シフト—名詞・代名詞をめぐって

Multi-Dimensional Shifts in English-Japanese Translation
— A Case Study of Nouns and Pronouns —

河原 清志

Kiyoshi KAWAHARA

1. はじめに

本稿は翻訳行為の本質を等価構築行為と仮定し、その等価構築に際して起こる翻訳シフトのあり方を、名詞・代名詞の訳出を例にとって多次元的に考察することを趣旨とする。

一般的に、翻訳とは異なった二言語間の言語変換であると考えられており、多面的・複層的・多義的な翻訳行為のうち「言語行為」の側面（翻訳行為の言語的側面）に焦点を当てた諸学説が展開された¹⁾。このいわば翻訳学における「言語理論」は「等価論」（等価の定義は後述）を基軸に論を展開してきたと言える。これに対して、「社会行為」としての翻訳の側面を看過していると批判するのが、主に文化的・イデオロギー的転回を遂げたとされている翻訳学の諸学説群である。これらは翻訳行為の言語的側面から目を社会的・文化的・政治的コンテキストのほうへ向けた研究を展開している²⁾。これは翻訳学における「文化理論」と位置づけられ、言語的な等価だけに議論の焦点を当てることを批判するいわば「等価誤謬論」である。

ところが、一部、翻訳学の言語学への回帰の主張（Vandeweghe, Vandepitte & Van de Velde, 2007）に見られるように、そもそ

も言語テキストの産出を本質とする翻訳を研究対象にする学問では、言語分析が基底となり、かつそれが言語テキストと社会文化的コンテキストとの分析の結節点となることは確かであって（cf. Toury, 1995）、言語分析への回帰という反動にも正当性はあると言えるだろう。他方、翻訳学の「言語行為」の側面に焦点を当てた諸学説群も、その拠って立つ理論装置である言語学自体の認知的、社会・イデオロギー的、あるいは行為論的転回の潮流にこれまで目配せを必ずしも十分にはしてこなかった／いまだしていないため、このような回帰とて空転する虞がある³⁾。

そこで本稿では、認知的、社会・イデオロギー的、行為論的視座を包握した言語理論の礎となりうるパース記号論の学知を抛り所にし、等価構築のあり方を見据えつつ、翻訳テキストの分析を「翻訳シフト」論を中心に、多角的に論じてみたい。

2. パース記号論から見た翻訳行為

米国・プラグマティシズムの科学哲学者・パース（Charles Sanders Peirce: 1839-1914）が考案した記号論（semiotics）は、対象（object）と記号（sign）との間に大きく、

類像性 (iconicity), 指標性 (indexicality), 象徴性 (symbolicity) という記号作用を見出した。まず, ①この類像性は, 対象 (Object; O) と記号 (Sign; S) とが同一/同等/類似/相似的であることを示す記号作用であり (指標性は S が O の存在を示す作用, 象徴性は S と O は恣意的な関係であることを示す作用), この記号作用は解釈項 (interpretant; 解釈者による解釈) を通して「対象≒記号」であると解釈者が見なす, つまり両者の間に等価性を見出すという記号に対する人の認知作用と位置づけられる。しかしながら, ②この認知作用は同時に, その認知行為の一時的, 偶発的で固有な意味作用でもあり, これは当該コンテキスト特有の意味を帯びる語用論的な解釈であって⁴⁾, 当該等価構築行為の一次的/二次的社会指標性をも有する (小山, 2008, 2009, 2011)。一次的社会指標性とは, 話し手・聞き手などのコミュニケーション出来事参加者たち, 言及指示対象, これらの間の社会的距離 (親疎), 力関係 (上下関係), 場 (コンテキスト) のフォーマリティーなどを示す概念である。また二次的社会指標性とは, これらのレジスターの利用者たち (話者たち) のアイデンティティや力関係上の位置を強く示す (指標する) という特徴を有する (小山, 2011, p.184)。さらに, ③これらの類像作用, (一次的/二次的社会) 指標作用の背後には, 行為者のもつ信念体系や価値観といった象徴的な世界観が言語行為に意識的ないし無意識的に反映されている (象徴作用の反映)。このように①類像作用, ②指標作用, ③象徴作用という 3つの作用が三位一体となって複合的に等価構築, 意味構築を行いつつ, 絶えず意味改変をしているのが人の言語行為の意味および意味づけのあり方であるといえよう。

これを翻訳行為一般に適用するならば, 対

象 O に対して S という記号を当てる行為はまさしく記号間翻訳であり, その一形態として O が起点言語テキスト, S が目標言語テキストである場合が狭義の翻訳, すなわち言語間翻訳であると言える (cf. Jakobson, 1959/2004, 真島, 2005)。そして両者に通底するのは, ①「O≒S」(対象と記号が等価な関係) であると見做す行為, すなわち等価構築行為という性質である (河原, 2011b)。しかしながら同時に, ②この「O≒S」は特定のコンテキストで生起する翻訳行為であり, 一回性・偶発性・固有性を有するもので, このような O≒S 等価構築行為自体のコンテキストを指標する記号作用をも同時に有する。さらに, ③翻訳者の有する価値観・信念体系といった象徴的世界観が翻訳意識となって作用する側面もあり, これらの複合的な意味構築行為が翻訳行為であると言える。

翻訳における等価構築行為は, (1) 等価構築という言語を介在した認知的側面, (2) 等価構築により原文著者と翻訳読者とを, 時空を超えて媒介するコミュニケーション行為という行為論的側面, および (3) 等価構築行為による社会的コンテキスト創出機能という社会・イデオロギ的側面を有している。そしてパース記号論は, これらを総合・統合する言語理論をも包摂した人の認識・認知行為一般を説明する学知であると捉える (あるいは再構築する) ことが可能である。そこでこの学知を基に, 以下で翻訳シフトについて多次元的に分析してみたい。

3. 翻訳等価と翻訳シフト

(1) 翻訳等価論

一般的に「等価」(equivalence) は, 「原文の意味と訳文の意味が同じになるように訳すこと」というある種の努力目標を語る言葉である (河原, 2013)。(但し, ここに言う

「意味」は、さしあたり常識的な用法に仮託して用いることとする。)しかし実際は、翻訳者による原文の解釈の不確定性とその解釈に基づいた訳文産出の不確定性の両者を内包した翻訳不確定性に晒されている⁵⁾。と同時に、言語構造の異なる二言語どうし、全く同じ意味で訳すことは原理的に不可能である(翻訳不可能性)。しかしながら、「等価」という概念は翻訳を学び、実践し、研究する上で必要不可欠な概念であり、「翻訳は等価に始まり等価に終わる」とさえ言える(Chesterman, 1989; Bassnett, 2002)⁶⁾。逆に言うと、等価概念を措定して初めて翻訳シフトも論じることができ、また翻訳の目的(skopos)、翻訳戦略(strategy)、多元システム(polysystem)、翻訳規範(norm)などの論点も論じられるのである。更には上記の文化理論群も、暗黙裡に等価を前提に、等価からの逸脱現象を社会文化的コンテキスト分析という手法によって解明するという研究方法論ないしイデオロギーを有していると言える。ここでイデオロギーとは、人間・自然・社会の総体について人々がいだく意識形態とする(田中, 1994)。

考えてみると、これまでの翻訳学の言語理論も文化理論も、その拠って立つ意味観は本質主義的であると言える。本質主義とは、意味は人の外部ないし内面にア・プリオリに本質的に存在し、それを起点言語から目標言語へ転移・伝達・転換するという考え方である。したがって、これまでの翻訳学学説は、等価(equivalence)が「等しい価値」、つまり人が「等しい意味ないし価値」だと意識的/無意識的に見做したものの言表への反映であると捉える構築主義的な方向へと発想の転換を明瞭に行っていないために、等価はある/ない、といった議論によって翻訳学の言語理論と文化理論の対立の構図が、特に文化理論の

サイドによって人為的に作出されてきた経緯がある。また、両者を補完的・融合的にとらえようとする主張もあるが(Tymoczko, 2002; Crisafulli, 2002; Chesterman, 2002など)、等価構築自体がそもそも社会的・文化的・歴史的・イデオロギー的な一回的・個別的な行為であり、言語による等価構築行為自体が社会的な営為であることを本稿は強調しておきたい。

(2) 翻訳シフト論

以上を踏まえて翻訳シフトについて考えていきたい。翻訳シフトとは、「起点テキストを目標テキストに翻訳するとき起きる小さな言語的变化」と定義される(Catford, 1965; Munday, 2012)。言語によって何を文法化し、何を文法化しないか、あるいはそもそも何を言語化し、何を言語化しないかについて相違があり、これが翻訳に付随する「損失と付加(loss and gain)」(Bassnett, 2002)となって現れるが、ヤコブソンの言葉を借りると(わかりやすいので英語のままに記すと)、"Languages differ essentially in what they must convey and not in what they may convey." (Jakobson, 1959/2004)となる。そこで、翻訳において言語的等価を実現しようとする、この"what they must convey"という部分で二言語間の言語構造上の違いにより義務的な翻訳シフトが生じ、"what they may convey"の部分で任意的な翻訳シフト、つまり個々の翻訳者にある程度委ねられた裁量によって翻訳実践のあり方がズレを生じることになる。

また、これは翻訳行為に対する社会文化的制約の観点ともある程度パラレルである。Toury (1995)は規範を効力(potency)の観点から捉えなおし、一方の極に絶対的規則(absolute rules)が存し、他方の極に純粋

な特異性 (pure idiosyncrasies) が存しており、規範はこの両極の連続体 (cline) の中間に位置するとした。絶対的規則は義務的シフトに、特異性は任意的シフトに対応すると考えられる。

以上から、翻訳の言語的側面、社会行為的側面の両面において、義務的にシフトが生じる極と、翻訳者の個性として任意にシフトを生じさせる極とがあり、これらが翻訳者の意識／無意識の反映となって現れる、という立論が可能となるだろう。

次に、翻訳シフトを分析するに当たって、どの単位に着目するかが問題となる。ベーカーは (翻訳教育の) 操作上、「等価」を5つの単位に分類した。①語のレベル、②語を超えたレベル、③文法のレベル、④テキスト構成のレベル、⑤語用論のレベル、の5つである (Baker, 2011)。①～④は言語構造、つまりコードの次元、⑤は語用論、つまり言語行為の次元であるところ、ベーカーは⑤を一貫性 (coherence) と含意 (implicature) という認知的側面の議論に矮小化してしまった。これは等価構築の「行為性」に照らすと誤謬を含んでいると言わざるをえない。①～④は二言語間の等価構築をする言語構造の地平で、⑤は翻訳行為のもつ社会行為の地平で論ずるのが適切であり、峻別したほうがわかりやすいからである。そこで本稿では、上述の論点で言うと、二言語間の構造論は主にこの①～④の地平で、二言語間の行為論は主に⑤の地平で分析することとする。

(3) 翻訳シフトの多次元性と言語相対性の複層性

さらに、翻訳シフトの多次元性を論じるうえで重要な「相対性」について考えてみたい。そもそも翻訳が扱う〈言葉〉はラング (langue: 言語) ではなくパロール (parole:

語用)、静的テキスト構造ではなく動的 (コン) テキスト過程の表出現象である。しかしながら、これまでの翻訳研究は前者をより前 (全) 景化させた論、つまり国民国家=民族言語=民族文化という一枚岩の言語が複数あり、その一枚岩の言語間での言語変換行為を扱う論、つまりは言語ナショナリズムを土台にした言語イデオロギーの産物であると言える (小山, forthcoming)。このような言語イデオロギーから展開したのは、「複数の言語」を比較対照するという言語理論、すなわち対照言語学や言語類型論の知見を応用した翻訳研究である (cf. 上述の翻訳言語理論群)。この点、Koller (1979) は対照言語学と翻訳の科学を区別したものの、等価自体を①外延的等価、②内包的等価、③テキスト規範的等価、④語用論的等価、⑤形式的等価、という必ずしも適当ではない分類に基づいた体系化を図った (その基本的な理由は上述のBaker, 2011と同じ)。

しかしながら、本来的に翻訳がパロール (語用)、すなわち翻訳というコミュニケーション行為の一回性・固有性を扱うものであるならば、一枚岩の「複数の言語」に照射するのみならず、同一の「言語の複数性」にも照射する必要が出てくる (cf. 藤本, 2009, pp.43-44)。さらには、同一「言語の複数性」のみならず一回々々の「言説の複数性」にも照射する必要もある。つまり、サピア=ウォーフ仮説で知られる言語相対論は、一般的に複数言語間の相対性のみ限定して論じているが、ここではその限定的な前提枠を拡大し、言語相対性の複層性を正面から認め、言語間／言語内／コミュニティ間／コミュニティ内／個人間／個人内の各相対性 (但し、これらはすべて非離散的な範疇) を丹念に分析することで析出される結果を微細に見る必要がある、とする (cf. Kay, 1996によるintra-speaker

relativity)。そうすることで翻訳物の産出の際に翻訳者が紡ぎ出す言説の社会的なバラツキ／ズレが考察でき、以って翻訳物の社会的な多様性を論じ、〈翻訳の多様性〉によって特徴づけられる社会文化の記号論的体系、言語間翻訳のみならず言語内翻訳まで含み込んだ記号間翻訳という本来の記号としての言語の営みを総合的に示すことができることとなる。

以上の議論を踏まえて、本稿では文法的等価、そのうち特に名詞・代名詞に着目し、二言語間構造の地平では認知言語類型論による翻訳分析を行い、次に、目標言語内の言語行為的側面の地平では、同じ名詞・代名詞の語用論的等価を取り上げて分析を行う。分析対象は、村上春樹と柴田元幸による競訳である(『翻訳夜話』)。競訳を選択した理由は、翻訳の目標言語内における多様性を論じるに当たり、同一の原文に対する複数の訳文を比較することで翻訳者間の翻訳相対性を分析するためである。

4. 二言語構造間シフトの分析

(1) 認知言語類型論によるシフト分析

前述のように二言語構造間シフトは複数のラング(言語)間の翻訳分析である。ここで言語間翻訳について語られる一般的な論を検討しておきたい。一般に、よい翻訳とは、(1) 正確で(Bakerの言う「正確さ」accuracy)、(2) わかりやすい(Bakerの言う「自然さ」naturalness) 翻訳であると翻訳者や翻訳研究者は考えている(安西・井上・小林, 2005, pp.49-65, 68-89; Baker, 2011, pp.60-63など)。しかし、何をもって正確でわかりやすい翻訳とするかについては、「直訳」対「意訳」の古典的な二項対立(Munday, 2012, pp.29-31) 以来、実務上も理論上も解決を見ていない。

ところが、一般的な意味で、ある特定の言語の「自然さ」や「その言語らしさ」が存在していることは否定できないし、その言語の話者であれば誰しもその言語の「自然さ」や「その言語らしさ」を支える「言語感覚」を持ち合わせている(と措定される)。この「言語感覚」には、(1) 語彙レベルにおける範疇化(categorization)の問題として捉えられる側面、(2) 文法範疇レベルにおける事態構成(construal)の問題として捉えられる側面、(3) テキストやレトリックのレベルにおけるテキスト構成(text organization)の問題として捉えられる側面(メイナード, 2004)など、諸側面がある。そこで本稿では、上述のとおり議論の焦点を絞るため、「言語感覚」というときの「感覚」とは、(2)を想定したその言語の特徴、もっともらしさ、自然さを表象する何らかの典型(prototype)であることとして⁷⁾、文法範疇に限定して「その言語らしさ」に照らして訳文のシフトを分析する。本稿は文法範疇の中でも、名詞・代名詞に焦点を当てて分析を行う。

近時、この文法範疇に関する言語ごとの典型性に関して、一般的な傾向として、いくつかの典型的な言語現象に焦点を当てたうえで、ある言語の特性を複数抽出し、その上で認知言語類型論として概括する試みがなされている。そのなかで河原(2009)は、通訳翻訳の訳出物を分析対象にして、英日語の事態構成(construal)⁸⁾の仕方に違いがあるかについて調査を行い、訳出行為におけるシフトの実際に迫った。この認知言語類型論は、諸々の言語事実の相互連関の背後にある形態を想定するものであるが、事実相互間の関係は相同性(homology)⁹⁾が認められるとされている(池上, 2007, pp.75-102)。このことを前提に、日本語と英語の相同的差異をまとめると、註10と巻末の表1のとおりになる。これは、池

上 (1981; 1982; 1991; 1999-2001; 2007), 安西 (2000), 中村 (2004) を参照しつつ、すべてを統合する形で一つの表にまとめたものである。

この研究により、日本語は「視点内置・移動型」認知形態で、言及指示対象の現前化力が強く、他方、英語は「視点外置・固定型」認知形態で、自己言及性が強い、と特徴づけられることが確認された。そして、実際の通訳翻訳事例でもそのことが量的データによってある程度裏付けられ、通訳翻訳の実際において、訳出者は日本語や英語特有の認知形態に合致する形での訳出物を産出するために、かなりの程度シフトが生じるように転換操作を行っていることが観察された (河原, 2009)。

これを、名詞・代名詞に関して敷衍して説明すると以下ようになる。モノの捉え方は、英語は視点外置の認知形態の志向性が強いいため、個々のモノを際立たせて言語化する、つまり<個性性>を言語化する傾向が強いため、モノ (有界性; boundedness) 注視の言語タイプであると言える。それに対して日本語は視点内置の認知形態の志向性が強いいため、状況全体を捉えて言語化する、つまり<状況性>を言語化する傾向が強いため、コト化された表現が多く、コト (無界性; unboundedness) 注視の言語タイプであると言える。また、英語では認知主体の視点が外置されているため、人称代名詞が客観的に頻繁に表示されるのに対し、日本語では認知主体が自己言及する1人称は、自己を前景化させる動機づけが背後にある場合であるというふうには、人称代名詞が言語化される頻度が極めて少ない (むしろ役割語やモダリティが人称に代わる機能を担っている)。3人称については、視点が内置されている日本語では、それを客観的な代名詞で言語化する必要は特になく、必要があれば言及対象をそのものとして固有名

その他を用いて表現することになる。したがって日本語では代名詞のゼロ化現象は頻繁に見られる。これに対して英語は代名詞が頻繁に使用される。

(2) 翻訳シフトの多次元性

以上のように河原 (2009) は主に言語学者 (池上, 中村) とシェークスピア翻訳者 (安西) の知見を統合・総合し、二言語間シフトの分析を通訳翻訳データから行ったが、これは一枚岩的な言語が離散的に複数あること前提に、それらの言語間のシフトのあり方を質的・量的に分析したものである。しかし、本来的な翻訳のあり方を正面から見るならば、目標言語側での言語内相対性、つまり、コミュニティ間/コミュニティ内/個人間/個人内の各相対性にも目配せをせねばならないこととなる。パースを継承した記号論学者・モリス (Charles W. Morris: 1903-1979) が唱えるように、記号過程には、(1)「記号媒体 (記号)」(sign-vehicle; sign), (2)「解釈者」(interpreter), (3)「解釈傾向」(interpretant), (4)「指示的意味」(signification; denotation), (5)「脈絡」(context; significatum), の5要因が関与する (笠松・江川, 2002, pp.119-125)。特に(5)のコンテキストや(2)の解釈者によって、(3)解釈傾向 (解釈項) が異なり、それに呼応して翻訳結果も相対化されることを論ぜずして、翻訳研究は原理的にあり得ない。またこれに関連し、そもそも言語使用 (語用) の出来事性からして、翻訳行為は本質的に一回性・固有性・偶発性を原理的に内包し、それが翻訳不可能性の根に存するのである。だとしたならば、抽象的・象徴的構造体としての言語構造間の語学説群のみによって翻訳テクニクを分析してみても、語用出来事としての翻訳の真の姿は見えてこない。そこで、次節では翻訳の多次元シフトを分析するにあた

り、認知言語類型論のみならず言語人類学的普遍文法を導入し、村上春樹と柴田元幸が競訳したRaymond Carver（著）によるCollectors¹¹⁾の翻訳を比較分析する。

5. 目標言語内シフトの分析

(1) 言語人類学的普遍文法によるシフト分析の論拠

上記を繰り返すと、翻訳シフトは二言語間のみを生じるのみならず、目標言語間、そして翻訳者間、あるいは翻訳者内でも生じる現象である。これは言語構造や社会文化的制約による義務的シフトから、翻訳行為のコンテキストの諸要因や翻訳者個人人の価値観や信念体系の違いから起こるさまざまなレベルでの任意的シフトに至るまで、多次元的である。このことを分析する理論的準拠枠として言語人類学的普遍文法を導入する。

この理論は、言語の本質が「何かについて、何かを述べる」という「言われていること」を表すことがその機能の1つであるとするならば、そのことと社会的指標性、つまり社会的に「為されていること」との相関を分析する理論である（小山, 2012など）。具体的には、「何かについて」という言及指示と「何かを述べる」という述定という言語使用に基づく①名詞句と②動詞・述語句・節という2種類の文法範疇と、それらがテキストとして紡ぎ出されるときに結合されていく文法範疇である③言及指示継続範疇と④節結合範疇とがある。そしてこれらは指標性の大小に基づいて階層化されている、という趣旨である。（小山, 2008, 2009, 2011, 2012）。本稿は名詞・代名詞に着目して分析を行うことから、名詞句階層についてのみ触れておく。名詞句階層とは、オリゴ（註10参照）に近いところから、ダイクシス（1・2人称代名詞, 3人称代名詞, 指示代名詞など）、固有名詞, 親

族名詞, 人間（位階・地位）名詞, 有生（動物）名詞, 一般具体名詞, 一般抽象名詞という順に階層化が普遍的に見られることを指す（小山, 2008, pp.228-242など）。

本稿は紙幅の関係上、この理論の全体系を扱えないため、前述の認知言語類型論で掲げた諸論点（巻末表1）a）～z）のうち、村上・柴田の競訳で顕著な特徴の一つである名詞句（上述のc）d）とf）g））を抽出し、これらについて認知言語類型論による説明と言語人類学的普遍文法による説明とを比較することによって、両理論の翻訳研究への適用のあり方を考えてみたい。

(2) 認知言語類型論と言語人類学的普遍文法の分析の比較

(2.1) c) 「名詞のとらえ方」とd) 「名詞のスキーマー」

まず、冠詞と名詞の数について考えてみたい。巻末表2を参照されたい。

(2.1.1) 認知言語類型論による分析

「手」という名詞の捉え方として、①のように原文では単複が示されていない場合は、日本語訳も単複が明示されていないし、単複が明示されている上記以外の圧倒的な場合にも、日本語では単複を明示しないのが標準的である。ところが原文で“hand”と単数形が明示されている②③の場合、一貫して村上は単複が明示されていない訳語、柴田は単数形が明示される「片手」という訳語を当てている。これは、英語と文法的類像性（有界性；個体スキーマー）を確保しているのが柴田訳、日本語のプロトタイプ（無界性；連続体スキーマー¹²⁾）に沿っているのが村上訳であると分析できる。二言語間シフトの観点で言えば、日本語規範（プロトタイプ）志向のほうがシフトの度合いが高い、つまり村上訳のほうがシフトの度合いが高いとも言える。

しかしながら、両者で二言語間シフトの傾向性に一貫性があるのかと思いきや、④⑤⑥を比較してみると、数量詞を用いて原文が単数形であることを明示しているのが村上訳④⑥、そして、柴田訳⑤である。このあたりの原文を示すと、“There was a bed, a window. The covers were heaped on the floor. One pillow, one sheet over the mattress. He slipped the case from the pillow and then quickly stripped the sheet from the mattress. He stared at the mattress and gave a look out of the corner of his eye. I went to the kitchen and got the chair.”となっている。ここは主人公が独身であることを示す細やかな情景描写の箇所であり、④も⑤も“a~, a~”“one~, one~”という反復構造があるため、どうしてもここは「1つ」という訳語を当てたいところである(但し、すべての“one/a”に「1つ」と訳出するとくどくなる箇所もある)。この点、村上は④で「ベッドが一つ窓が一つ」と単数性を訳出したため、⑤では単数性を訳出しなかった。ところが柴田は④で単数性の訳出を控え、⑤で訳出するという工夫をしている。また、⑥は独身の情景描写とは直接関係ないため、「1つ」という訳語は任意であるが、②③で示した傾向とは異なり、村上のほうが「一つ」と訳出している。ここからわかることは、一般的には日本語訳がなされる場合には、連続体スキーマのプロトタイプという言語規範に即して訳出されることが多い。しかしシフトのあり方は翻訳者傾向として一義的に確定するものではなく、テキストどうしの前後関係(co-text; 文脈)と訳文における反復構造の効果など様々な言語/社会的コンテクスト的要素も加味して判断されると考えられる。

(2.1.2) 言語人類学的普遍文法による分析

これを普遍文法で分析するならば、有界性のある個体として名詞を表現するほうが、無界性の連続体表現よりも個物性が強く、オリゴからの距離が近いと言える。名詞句階層として、「具体名詞>抽象名詞」、コミュニケーション空間として、「個別化可能なもの>言及指示可能なもの」、という順でオリゴから指標性が階層化されているためである。だとしたならば、英語から日本語へ翻訳するとき、各々のプロトタイプ(言語規範)に従うならば、「有界性>無界性」という階層が社会指標空間に認められ、一般的には日本語へ翻訳する際、名詞における数の認知フレームが外れることになり、名詞の具体的言及指示性が弱まることからくる階層シフトが伴うと言える。

ところが、この社会指標性の操作(という認知フレームの転換)は相対的であり、英語の社会指標性をそのまま維持する翻訳(仮にこれを直訳とする)と、目標言語である日本語のプロトタイプを反映させた翻訳(仮にこれを意識とする)とで、同一翻訳者内に揺れも生じる。そのことを、名詞表現の訳出のズレからも考えてみたい。巻末表3を参照されたい。

(2.1.3) 異化効果の分析

まず主な傾向として読み取れるのは、村上訳のほうがカタカナ語を多用している点である(⑦ポーチ, ⑩サウス・シックス・イースト, ⑫エレガントな, ゴージャスな, ⑭クローゼット, ⑯アタッチメント, ⑰アドレス, ⑱シャンプー, ⑲バックル, ⑳カーペット・シャンプー)。カタカナは音訳の一種であり、<直訳-意識>の二項対立でいえば原文の音韻的な類像性を再現するという意味で直訳の要素が強い。言及指示している対象自体は、⑦であれば「ポーチ」であれ「玄関先」であ

れ、同じである（フレーゲによる「宵の明星」と「明けの明星」の議論を参照。フレーゲ、1999/1892）。二言語間シフトの点からすると、「ポーチ」は音韻的類像性を、「玄関先」は意味的類像性を、それぞれ求めた訳語ということになる（この点、パースの類像性について、イメージ、ダイアグラム、メタファーの下位3分類を参照されたい。前者はイメージ、後者はメタファーに対応する。cf. 平賀、1992）。しかしながら、社会指標的な意味でのシフトの点からすると、大きな差が認められる。カタカナ語の訳語を選択した場合、日本以外の異国情緒を想起させてしまう。日本人読者にとっては、異質なものを、日本的ではない何か、が連想される（これは異質なものを異質として受容化するものであり、本稿では「異質同化 (domesticating the unfamiliar)」と呼ぶ）。他方、⑧mailmanを村上は「郵便配達夫」と訳し、柴田は「郵便屋」と訳しているが、現在の日本語話者の平均的な読者であれば、おそらく「郵便屋」のほうが使用頻度も多く一般的だと思うであろう。「郵便配達夫」とわざわざ訳出することによる日本語における何らかの「異質なもの」、つまり、「同質異化 (foreignizing the familiar)」という意味での異化作用を持った訳語を選択していることがわかる（おそらくはこの "mailman" の存在自体をテキスト上前景化させる効果を狙っているとも考えられる）。村上は、異質同化、同質異化によって何らかの効果を持たせていることが観察される。これは、⑪や⑫も同様で、わざわざ「電気」掃除機、「真空」掃除機、と訳出したところに、微妙な異質性を感じさせる。このことを社会指標性の観点から考えてみよう。

(2.1.4) 訳出と翻訳者アイデンティティの関係

まず訳語の選択によって、そこで言われて

いることがどういう社会状況で起きているのかについての指標性を表出することになる（一次的社会指標性）。そして、そのような訳語を選ぶ行為によって、その翻訳者の使用する翻訳戦略、翻訳者アイデンティティや翻訳イデオロギーを表出している（二次的社会指標性）。村上は現代の日本語での使用頻度が必ずしも高くないカタカナ語（異質同化）や日本語（同質異化）を愛好することで異化効果を狙った翻訳を行うという翻訳傾向と翻訳者アイデンティティを表出し（⑮⑯の度量衡の訳出にもそれが現れている）、柴田は日本語訳としてのプロトタイプに順応した訳語を愛好するという翻訳傾向と翻訳者アイデンティティを表出している。

但し、留意する必要があるのは、このような訳出傾向、翻訳者アイデンティティが一般傾向として観察されたとしても、例えば柴田による⑨⑬の訳語選択は、柴田の一般傾向に反するものであり、それにより文体の流れにある種の「弾み」と「面白み」を増す効果を持たせているとも考えられる。つまり、自ら定立した傾向からシフトさせる／逸脱するという個人内の言説の相対化が看取される。

(2.2) f) 「1人称代名詞」とg) 「代名詞省略」

(2.2.1) 量的データ

まず「I」の訳出として、村上は一貫して主人公を「僕」と表現し（計66個）、柴田は一貫して「私」と表現している（計55個）。また、村上主人公が collector たる相手に対して引用節中で自分に言及する場合は「私」（4カ所）、柴田は「僕」（4カ所）である。そして、“we”の訳出として村上が「私たち」を4カ所、柴田が「私たち」を3カ所使用している。他方、ここでは3人称代名詞も取り上げて考えてみると、この相手のこと（“he”）を村上は「彼」と訳出／描写し（計98個）、

柴田は「男」と訳出／描写している(計73個)。もっとも、the man said などのような場合は村上も「男」と訳している(3カ所)。さらに、引用節中の“you”の訳出については、両者とも「あなた」と訳出している箇所がある(村上は11カ所、柴田は3カ所)。

このカーヴァーの小説は一人称のスタイルで一貫して書かれている。その主人公に、村上は「僕」と言わせ、柴田は「私」と言わせている。「僕」と「私」では翻訳の読者にかなり異なった印象を与えるだろう。この点、話者“I”の人物解釈が村上・柴田の両者で分かれ、村上は肉体労働者だろうと言い、柴田はパッとしない知的労働者(「私」=シバタで読んでたから(笑))だろうと言っている(村上・柴田, 2000, pp.188-189)。

(2.2.2) 認知言語類型論による分析例

二言語間シフトの観点から分析してみると、日本語のプロトタイプとして代名詞はゼロ化されるため、日本語の言語規範に沿った訳語選択としては「ゼロ化； ϕ 」となる場合が多いはずである。もちろん、緻密に検討すると、原文に“I”とある箇所で村上・柴田の両者がそれを「ゼロ化」という二言語間シフトを実現している箇所も多い。また、村上の「僕」と柴田の「私」とで個数に11個の差がある。これは両者で“I”をゼロ化するか否かにつき、両者にズレがあることの証左である。これは3人称代名詞についても同様にあてはまるが、面白いのは“he”を村上は「彼」と訳出し、柴田は「男」と訳出している点である。個数が村上のほうが多いのは、原文に忠実に主語を「彼」で訳出する傾向が強いことが読み取れる。ここで柴田が、代名詞である「彼」ではなく「男」という普通名詞で一貫して訳出している点は、テキスト言語学には同一語の再叙による語彙的結束性の観点から説明可能である(あるいは代名詞の代用

とも取れる。ハリデー・ハサン, 1997)。以上から、二言語間シフトの観点からは、「私」「僕」には違いがあるものの、認知言語類型論からは説明がそれ以上は不可能であるし、「彼」「男」の場合は、類像性の度合いからすると「彼」のほうが原文との類像度が高く、「男」のほうが低いため、「男」のほうが翻訳シフトの度合いが高い、という説明ぐらいしかできない。

(2.2.3) 巨視的伝達と微視的伝達の視点

これを異文化コミュニケーションとしての翻訳行為論として見ると、翻訳行為には①言語行為、②コミュニケーション行為、③社会的文化的行為の3側面が指定されるが(河原, 2011a)、②に着目すると、代名詞の明示的訳出は、巨視的伝達を微視的伝達より優先したものの、という位置づけになる。「微視的伝達とは、物語の世界内で登場人物がやり取りをする伝達のことである。他方、巨視的伝達とは、作者から観客へ向けられたコミュニケーションのことである」(山口, 2007, p.22)。つまり、日本語読者に登場人物の特定をしやすくすること、人物描写を明確にしやすくすること、などの動機から、通常であれば(つまりプロトタイプ的には)代名詞をゼロ化する局面で「僕」「私」「俺」「あたし」などと自称する人物像としてそのキャラクターを言語化する傾向が翻訳にはあることが指摘できる(上掲, 山口, 2007などの役割語の諸研究を参照)。また、「彼」なのか「男」なのかで、この相手であるcollectorの人物像も異なった特徴づけができるという説明は可能だ。この点に関し、柴田は「日本語は代名詞をあんまり使わないから、本当は『僕』も『私』も何も言いたくないということも多くて、なるべく主語抜きで書きたいけれども、やっぱり前後の関係である程度、主語を入れないと意味がわからなくなるというほうが問題ですね」

と発言している（村上・柴田, 2000, p.54）。（この点, 両者とも引用節中の「僕」「私」を地の文から使い分けをしていることにも呼応している。）

(2.2.4) 言語人類学的普遍文法による分析

今度はこれを社会指標性のシフトの観点（上記で言うと③に当たる）から分析してみよう。「僕」「私」は名詞句階層で言えば同じ階層に属する, つまり指標性は同程度高いが, 一次的社会指標性には差がある。村上は「たとえば, 少年時代のこと, あるいは若い時代のことだと『僕』のほうがふさわしい場合が多いわけだけれども, 少し中年になってくると『僕』ではなじまない部分もあって, だいたい『私』になります。」としている（村上・柴田, 2000, pp.52-53）。しかしながら, 村上は「で, 正直言ってどっちでもいいんですよ。[…] 深く考えだすと, かえってわからなくなっちゃう。[…] すべてはテキストが規定するし, 僕はその流れに乗るだけだから。」とし, それを承けて柴田は「僕も基本的にはその作品全体のトーン, あるいはそのキャラクターのトーンに従っているつもりですが, 案外, 何か他の要素との兼ね合いで自動的に決まっちゃうことも多いですね。」と言っている（村上・柴田, 2000, pp.52-53）。つまり, 翻訳者の意識（翻訳イデオロギー）としては, それほど指標的意味の違いを意識せず訳出していると考えられる。だとすると, 当時, 中年であった村上と柴田は両者とも自分を「僕」と表現することからして, 「僕」と訳した柴田は自らの像をある程度そこへ投影したとも考えられる（上記引用箇所参照）。その点で, 両者の訳語の違いが両者の人物解釈の違いを指標しているのである。また, 一般的には「私」のほうが標準的な1人称代名詞であるとするならば, 村上のほうが原文とのシフトの度合いが弱く, 柴田のほうがよりキャラク

ターづけをしているという意味でシフトの度合いが高いという分析も可能となろう。

では, 3人称代名詞はどうか。名詞句階層からすると, 「彼>男」の順で指標性が高い。「男」は名詞句階層の「人間名詞」で, オリゴからの距離が遠い。他方, 「彼」は今日の日本語の3人称代名詞として広く認知され使用されているものの, 元々西洋言語の翻訳語であるため（柳父, 1982, pp.193-212）, 異質同化の要素がある。このことからすると, 村上は原文との類像性を高めることで原文に忠実というニュアンスを醸し出す文体をこの「彼」を98か所使用することで作出しているとも言えよう。これがまさに二次的社会指標性である翻訳者の文体に関するアイデンティティと深く関わりがあると考えられる。このことは, 前述のカタカナ語の訳出の観察と一致する。

6. まとめ

以上のように, 認知言語学に基づく二言語間シフトの分析は言語構造ないしコードレベルでの英日語間の比較対照分析であって, 具体的・一回的な社会文化的コンテキストに投錨された翻訳出来事で一体何が起きているのかについて, 如実に分析できる枠組みでは必ずしもないと結論づけることが可能である。逆に言うと, 「何がなされているか」という社会指標的意味を扱う言語人類学的普遍文法に則って指標性に比例する名詞句の階層を論じることで, 当該コンテキストで何が創出的になされ, その行為ないし出来事に対してコミュニケーション参加者がどのような翻訳意識やアイデンティティを見出しているかについて, 分析が可能であると思われる。しかしながら, 社会的指標性のシフトを分析する前提として, 原文と翻訳文との言語コードの地平での二言語間シフトの分析が土台になって

はじめて、翻訳行為の地平の分析も可能となる。その意味で翻訳分析において両者は相互補完的に分析の準拠枠として大切だとも言えよう。

また、言語相対性に呼応した翻訳相対性も、言語の一枚岩的な側面のみを照射するのではなく、言語内の複層性、言説内の複層性にも目配せをすることで、翻訳行為で何がなされているのかについて深く考察することが可能となった。ここにおいて「日本語＝状況密着型認知形態 (I モード) / 英語＝認知主体外置型認知形態 (D モード)」をプロトタイプとするという分析は真の意味で「非離散的類型論」であると言え、発達心理学 (ピアジェ) 的にも科学哲学 (西田, あるいは現象学の認識論) 的にも自然科学 (ハイゼンベルグ: 不確定性原理) 的にも I モードこそ真実に近い認知形態であることが確認されている (中村, 2004, p.40)¹³⁾。つまり、人は絶えず、外界とのインタラクションによって状況に密着して一回々々言葉に対して意味づけを行う、つまり I モードを標準の認知モードとして事態構成しながら言語を操るのであって、英語のように使用する言語が D モードをプロトタイプとする場合は、D モードの認知形態が前景化しやすくなる。そして二言語を扱う翻訳者は言語の背後にあるプロトタイプ的な型に応じ、言語に応じて I モード性が強くなったり D モード性が強くなったりしながら認知モードの切り替えを行っていることが指摘できる。それが二言語間におけるある種の直訳対意識の認知的動機づけではある。ところがそれ以外にも様々なコンテキスト要因に左右されながら翻訳者が事態構成を行ったり、あるいは翻訳者自身の翻訳意識や価値観・信念体系などが言語使用に反映されたりするなど、多次元的なレベルでの言説の相対性が観察されるのが翻訳行為の実際である。このように、言

語間のみならず言語内、個人内といった多次元レベルでシフトが生じ、それらをすべて含み込む形で一回々々の訳文決定を行うという主体的行為がまさに翻訳の等価構築行為なのである。

繰り返しを恐れずに言うならば、パース記号論によって、類像性は、対象 (O) と記号 (S) とが同一 / 同等 / 類似 / 相似的であることを示す作用で、 $O \approx S$ であると解釈者が見出す、つまり $O \approx S$ 間に等価性を見出す人の認知作用のことであることを前提とし、翻訳においては、ST (起点テキスト) \approx TT (目標テキスト) として翻訳者が見出すという認知作用を通して一回々々の訳文産出を主体的に行う。そしてそこには翻訳者のイデオロギー / アイデンティティが介入し、かつまた、他の様々な社会文化的コンテキストや当該テキスト自体の諸要因も主体的な訳文選択に関与するのである。したがって、原理論として、本質的に「存在」する等価な意味を言語間で転移するというのが翻訳の営みなのではなく、等価 (つまり等しいと見做す価値 / 意味) のあり方は翻訳を行う主体間で相対的なものであり、等価は多次元レベルでシフトを生じさせながら翻訳者が一回々々の翻訳行為によって作り上げてゆく (構築する) ものであることを、名詞・代名詞の訳出事例の分析によって確認した。

註

- 1) 「等価」「翻訳シフト」「翻訳戦略 (ストラテジー)」「テキストタイプ論」などがあり、これに社会行為性が加味された「目的 (スコポス) 理論」「レジスター分析」「多元システム理論」「翻訳規範論」なども展開している。
- 2) Bassnett & Lefevere (1990), Cronin (1996), Snell-Hornby (2006), Pym, Shlesinger & Jettmarova (2006) など。Munday (2012) は「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの翻訳理

- 論」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の(不)可視性」「翻訳の権力ネットワーク」などを挙げているが、他にもさまざまある(河原, 2011a)。
- 3) Munday (2009) 第2章によると翻訳学は、(1) 言語学的段階、(2) コミュニケーション論的段階、(3) 機能主義的段階、(4) 倫理・美的段階、を経てきたという。しかし、Snell-Hornby (2006) が、(1) 前言語学的段階、(2) 言語学的段階、(3) 1980年代の文化的転回、(4) 1990年代の学際的段階、(5) 1990年代の諸転回、(6) 2000年代の回帰? という流れを示しているが、この理解のほうが全体を俯瞰するうえで有効であるように思われる(河原, 2011a)。
- 4) カテゴリー化／等価行為は、コンテキスト負荷性(社会指標性)のみならず、そのコンテキストが帯有する恣意性・文化相対性・利害関心負荷性(象徴性)も有している(小山, forthcoming)。
- 5) 指示の不確定性から翻訳の非決定性原理を導いているクワインを参照されたい(Quine, 1960)。本稿は言語行為一般にみられる意味の不確定性から、翻訳の不確定性を導出している。
- 6) 「等価」概念を記述的研究目的で導入した代表格がトゥーリー(Toury, 1995)、翻訳教育目的(したがって規範的/規定的目的)で導入した代表格がベーカー(Baker, 2011)、という位置づけになる。確かに等価概念は翻訳研究の社会・文化的転回以来、禁句になった感があるが(特に Snell-Hornby, 1990; Bassnett & Lefevere, 1990; Lefevere, 1992; Bassnett & Trivedi 1999; Bassnett 2002など)、言語的等価に多元性・機能性を加味して考える立場(Koller, 1979/89)、歴史的共通認識、つまり幻想としての等価を積極的に認める立場(Pym, 2010)、規範分析の手続的概念として前提的に認める立場(Toury, 1995)、起点-目標言語間の「解釈的類似」判定の基準として暗に認める立場(Gutt, 2000)、翻訳の評価・実務において起点-目標言語間に何らかの等価を想定する立場(Neubert, 1994)などもあり、言語の意味の原理論から改めて深く掘り下げて再考する必要がある。
- 7) 本稿は言語「らしさ」を論ずるものである。したがって、「真か偽か」という古典のカテゴリー観(離散的カテゴリー)ではなく、「～らしさ」というプロトタイプに基づいたカテゴリー化を論ずるものである(Lakoff, 1987; Taylor, 2003)。
- 8) ここにいう construal は「発話プロセスにおいて、外界を把捉し分節して意味あるものとして構築する創造的営み」のことである(菅井, 2002)。
- 9) A:B::A':B' という構造があった場合、AとA'はBとB'との関連において相同項であるといい、(少なくとも)二つの項から成る(少なくとも)二つの関係の間に等価の関係のあることを相同性(homology)という(池上, 2007, pp.86-95)。
- 10) 英日語の認知言語類型論に関して、具体的言語事実レベルと、その背後にある認知的な形態レベルをすべて各言語の特徴として一括してまとめると、巻末表1ようになる。(但し、個々の項目の詳細は紙幅の制限上、割愛する。河原, 2009からの引用である。)
- これ以外にも、日本語の特質として例えば、形容詞の意味の内面的解釈への志向性、指示詞の用法における<ここ>への強い拘り、擬似関係節のような<コト>的表現への志向性、時制の処理における著しい<いま>への拘りなどが挙げられる(池上, 2007, p.355)。
- 池上(2007)の「日本語=主客合体/英語=主客分離」、中村(2004)の「日本語=状況密着型認知形態(Iモード: interactional mode of cognition)/英語=認知主体外置型認知形態(Dモード: displaced mode of cognition)」という捉え方を、河原(2009)が行った通訳翻訳データの分析結果から敷衍すると次のようになる。
- まず、行論の前提として、一般の言語行為状況について簡単に説明する。ヤコブソン(1973, pp.154)を多少言い換えると、言語行為を発話出来事(=E^s; その基点をオリゴ(origo)と呼ぶ)とし、それが指標する出来事を語られる出来事(=Eⁿ)とし、そしてそれぞれの参与者をP^s, Pⁿとすると、転換子(shifters)*は、人称=Pⁿ/P^s、時制=Eⁿ/E^s、法=PⁿEⁿ/P^sの関説であると言える(ヤコブソン, 1973, pp.154-166)。また、E^sとEⁿの指標関係は、(i)オリゴで行われる発話出来事を指標する再帰的較正(reflexive calibration)、(ii)具体的な経験的出来事空間で現実に生起する(した)出来事を指

標する較正 (reportive calibration), (iii) 遠い象徴空間の事象を指標する象徴的較正 (nomic calibration), の3つが考えられる (Silverstein, 1993)。

このことと認知言語類型論の一般的な考察結果を踏まえてまとめると、まず、英語はオリゴに視点が固定され、かつ外界というコンテクストを客観的に言語化し、視点が外置されているのに対し、日本語は視点が固定されず、外界とのインタラクションをする主客合一の形で言語表現をし、視点がコンテクストに内置されている。つまり、「英語は視点外置・固定型」、「日本語は視点内置・移動型」であると言える。そこから次のことが演繹される。

まず、人称代名詞については本文で説明をしているので、そちらを参照されたい。つぎに指示詞に関しては、英語の場合は外置された視点から客観的に事態構成するため、言及対象同士の関係性を指示詞によって客観化する頻度が高いが、日本語の場合は状況に埋没させ、わざわざ指示詞を使用する必要はなく、特に指示が必要な場合に指示詞を使うという動機づけが想定される。特にtheは、①外界照応、②ポインティング、③テキスト内照応の3つがあり**、外置された視点から対象を言及指示する際に、一つ一つ「指定」(specifying) するという動機づけがあるためにtheの使用頻度は高い。またthat, thisなどの指示詞も同様に、外置された視点から対象を言及指示する際に、オリゴとの距離感を指標する必要性は日本語に比べて高い。そして英語に極めて特徴的なのは、上記①②といういわば外界を指標する際に指示詞・定冠詞を使用するのみならず(日本語にも見られる)、E^sがEⁿを指標する際にEⁿ=E^sつまり既出コ・テキストに言及するという(i)再帰的較正としてテキスト内照応させている頻度が高いことである。以上の考察から、英語は日本語に比べ、認知主体や発話出来事に対する「自己言及性」(self-reflexivity)が高いことが指摘できる。

つぎに、日本語のほうがコト化された事態構成の頻度が高いのは、状況に視点が内置されているため、出来事の直接経験性が高く、ある出来事や事象を英語のように名詞句表現でモノ化するのではなく、動詞は動詞のまま表現するという動機づけが働いているものと思われる。し

たがって、ある事態をセンテンスで表現し、それをコト化してつなげるという表現形態が取られやすい。また、動詞のとらえ方に関しては、あるモノが他のモノへ働きかけをして変化を引き起こしたという因果関係を明示化する英語に対して、日本語は、モノがあり、それを参照点としてその状況下で別のモノに何がしかの変化が起こる、という事態構成を好むと考えられる。したがって、日本語のほうが受け身形が多く見られるなど、ナル的な動詞表現が多いこととなる。同じ事態を構成する上で、英語はスル的・他動詞構文的な表現を好み、日本語はナル的・自動詞構文的な表現を好むのである。また、このことは焦点連鎖構造における英日語の違い(英語はTragector→Landmarkという他動性をプロトタイプとする焦点連鎖構造、日本語は参照点→標的という主題卓越的な構文をプロトタイプとする焦点連鎖構造)ともパラレルに論じることができる。

時制に関しては、日本語のほうが過去のEⁿに対してル形(現在形と考えられがちな語形)を使う頻度が高いのは、オリゴに視点が固定されている英語とは違い、日本語の場合、視点がEⁿに移動するからだと考えられる。換言すると、発話出来事によって言及対象たるEⁿはオリゴで表現され(re-presentation, つまりオリゴ外空間でpresentな事態をオリゴでre-すなわち再びpresent現前化すること)、提示されると考えるならば、オリゴに視点が内置されているところにEnを引き込む力、つまり言語の現前化力が日本語のほうが強いと結論づけることができよう。

註* 語られる出来事およびその参加者が、発話出来事およびその参加者への間説を含む場合を転換子 (shifter) という(ヤコブソン, 1973, pp.154-158)。具体的には、人称、法、時制、証言性がそれに当たる。

註** 英語の定冠詞の機能は「指定」(specifying)であり、これには①集団・個人間の共有知識、②ジェスチャーによる指定 (pointing)、③言語コンテクスト(前後関係)の3つがその指定を動機づけるとされている(Allen & Hill, 1979)。本文の①外界照応、②ポインティング、③テキスト内照応は、上記の①~③に対応する。)。

- 11) 失業中の30代と思しき男のもとへ、その家人に懸賞が当たったと部屋の中まで入ってきた男が、カーペットやらいろいろな部屋にあるものを電気掃除機で掃除をして去っていく話。
- 12) プロトタイプとは、カテゴリーにおける代表例のことをいう。そしてこのプロトタイプには、典型事例 (typical token) と解する範例モデルと、典型例を基盤に形成される概念 (prototype) を表すと理解するいわば概念モデルがある。概念モデルでは、典型例の持つ特徴の概念的要約、ないしはスキーマ的表象を中心に考える (吉村, 2002)。そして、この「スキーマ」とは、同じ事物を指す他の表示よりも概略的で詳細を省いた記述がされている意味、音韻、もしくは象徴構造を指す (熊代, 2002)。
- 13) 中村 (2004) によると、発達心理学において、ピアジェは子供の発達のある段階で場面の外に仮想の視点を置いて眺めるようになる過程を脱中心化 (decentration) と呼んだ。これがDモードに対応し、脱中心化以前の認知がIモードに対応する。また、科学哲学において、デカルトが観られる客体に対峙して視る主体を立て、いわば主客分離を前提として認識があるとしたのに対して、西田は、主客の区別のない主客合一の上に真の認識が成立するとした。前者がDモード、後者がIモードに対応する。さらに、自然科学ではハイゼンベルグが、自然界や客観世界は自然とわれわれの関係の像であり、人間と自然との相互作用の一部であるとしている。これはまさにデカルト的なDモードは幻想だということになる (中村, 2004, pp.36-40)。

参考文献および翻訳資料

- Allen, R. & Hill, C. (1979). Contrastive between ϕ and THE in spatial and temporal predication: unmarked representation of coding locus as reference point. *Lingua*. 48:123-176.
- 安西徹雄 (2000). 『英語の発想』筑摩書房.
- 安西徹雄・井上健・小林章夫 (編) (2005). 『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社.
- Baker, M. (2011). *In other words*. London/New York: Routledge.
- Bassnett, S. (2002). *Translation studies*. London/New York: Routledge.

- Bassnett, S. & Lefevere, A. (1990). *Translation, history and culture*. New York: Pinter.
- Bassnett, S. & Trivedi, H. (Eds.). (1999). *Post-colonial translation: Theory and practice*. London/New York: Routledge.
- Catford, J.C. (1965). *A linguistic theory of translation*. Oxford: OUP.
- Chesterman, A. (Ed.). (1989). *Readings in translation theory*, Helsinki: Finn Lectura.
- Chesterman, A. (2002). On the interdisciplinarity of translation studies. *Logos and language* 3 (1). pp.1-9.
- Crisafulli, E. (2002). The quest for an eclectic methodology of translation description. In T. Hermans. (Ed.). *Cross-cultural transgressions: Research models in translation studies II: Historical and ideological models*. Manchester: St Jerome. pp.26-43.
- Cronin, M. (1996). *Translating Ireland: Translation, languages and identity*. Cork: Cork University Press.
- フレーゲ, G., 土屋俊 (訳) (1999/1892). 「意義と意味について」黒田亘・野本和幸 (編集), 『フレーゲ著作集〈4〉哲学論集』勁草書房.
- 藤本一勇 (2009). 『ヒューマニティーズ 外国語学』岩波書店.
- Gutt, E. A. (2000). *Translation and relevance: Cognition and context*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- ハリデイ, M. A. K. & ハサン, R. (1997). 『テキストはどのように構成されるか』 (安藤貞雄・本田保行・永田龍男・中川憲・高口圭輔・訳) ひつじ書房. [原著: Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman].
- 平賀正子 (1992). 「詩における類像性について」日本記号学会 (編) 『ポストモダンの記号論: 情報と類像』73-85頁. 東海大学出版会.
- 池上嘉彦 (1981). 「『する』と『なる』の言語学: 言語と文化のタイポロジーへの試論」大修館.
- 池上嘉彦 (1982). 「表現構造の比較 — 〈スル〉的な言語と 〈ナル〉的な言語 —」國廣哲彌 (編) 『日英比較講座第4巻: 発想と表現』67-110頁. 大修館.
- 池上嘉彦 (1991). 『〈英文法〉を考える』ちくま

- 書房.
- 池上嘉彦 (1999~2001). 「'Bounded' vs. 'Unbounded' と 'Cross-category Harmony' (1)~(24)」『英語青年』1994年4月号—2001年3月号. 研究社.
- 池上嘉彦 (2007). 『日本語と日本語論』ちくま書房.
- ヤコブソン, R. (1973). 『一般言語学』(川本茂雄・監修・田村すず子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子・訳). みすず書房. [原著: Jakobson, R. (1963). *Essais de linguistique generale*. Paris: Editions de Minuit].
- Jakobson, R. (1959/2004). 'On linguistic aspects of translation'. In Venuti, L. (Ed.). (2004). *The translation studies reader*. 2nd edition. London/New York: Routledge.
- 笠松幸一・江川裕晃 (2002). 『プラグマティズムと記号学』勁草書房.
- 河原清志 (2009). 「英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析—認知言語類型論からの試論」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会 (編) 『翻訳研究への招待』第3号. 29-49頁.
- 河原清志 (2011a). 「概説書に見る翻訳学の基本論点と全体的体系」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会 (編) 『翻訳研究への招待』第5号. 53-80頁.
- 河原清志 (2011b). 「翻訳語のカセット効果論: 無限更新の意味生成の営み」青山学院大学英文学会 (編) 『青山学院大学英文学思潮』第84巻. 69-88頁.
- 河原清志 (2013). 「等価」鳥飼玖美子 (編著) 『よくわかる翻訳通訳学』(118-119頁) みすず書房.
- Kay, P. (1996). Intra-speaker relativity. In J. J. Gumperz & S. C. Levinson (Eds.). *Rethinking linguistic relativity*. pp.97-114. Cambridge: Cambridge University Press.
- Koller, W. (1979/1989). Equivalence in translation theory. translated from the German by Chesterman, A. In A. Chesterman, (Ed.). (2004). pp. 99-104. Kay, P. (1996). Intra-speaker relativity. In J. J. Gumperz & S. C. Levinson (Eds.). *Rethinking linguistic relativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』三元社.
- 小山亘 (2009). 『記号の思想』三元社.
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論』三元社.
- 小山亘 (2012). 『コミュニケーション論のまなざし』三元社.
- 小山亘 (forthcoming). 「記号論と翻訳論の地平: 接触, 出来事, メタ語用」. (未刊行)
- 熊代敏行 (2002). 「スキーマ (schema)」辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』(124-125頁). 研究社.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire and dangerous thing*, Chicago: University of Chicago Press.
- Lefevere, A. (1992). *Translation, rewriting and the manipulation of literary frame*. London/New York: Routledge.
- 真島一郎 (編) (2005). 『だれが世界を翻訳するのか: アジア・アフリカの未来から』人文書院.
- メイナード, K. 泉子 (2004). 『談話言語学: 日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究』くろしお出版.
- Munday, J. (Ed.). (2009). *The Routledge Companion to Translation Studies*. London/New York: Routledge.
- Munday, J. (2012). *Introduction to Translation Studies*. London/New York: Routledge.
- 村上春樹・柴田元幸 (2000). 『翻訳夜話』文芸春秋.
- 中村芳久 (2004). 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」中村芳久 (編) 『認知文法論Ⅱ』(3-51頁). 大修館.
- Neubert, A. (1994). Competence in translation: A complex skill, how to study and how to teach it. In M. Snell-Hornby, F. Pochhacker & K. Kaindl (Eds.). *Translation studies. An interdisciplinary*. pp.411-420. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Pym, A. (2010). *Exploring Translation Theories*. London/New York: Routledge.
- Pym, A., Shlesinger, M. & Zuzana J. (Eds.). (2006). *Sociocultural aspects of translating and interpreting*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Quine, W. V. O. (1960). *Words and object*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Silverstein, M. (1993). *Metapragmatic*

- discourse and metapragmatic function. In J.A. Lucy (Ed.). *Reflexive language: Reported speech and metapragmatics*. pp.33-58. Cambridge: Cambridge University Press.
- Snell-Hornby, M. (1990). Linguistic transcoding or cultural transfer: A critique of translation theory in Germany. In S. Bassnett & A. Lefevere (Eds.). *Translation, history and culture*. pp.79-86. London/New York: Routledge.
- Snell-Hornby, M. (2006). *The turns of translations studies: New paradigms or shifting viewpoints?*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 菅井三実 (2002). 「解釈／捉え方 (construal), 解釈する (construe)」辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』(20-21頁). 研究社.
- 田中義久 (1994). 「イデオロギー」見田宗介・栗原彬・田中義久 (編) 『社会学事典』(53-55頁). 弘文堂.
- Taylor, J. (2003). *Linguistic categorization*. Oxford: Oxford University Press.
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Tymoczko, M. (2002). Connecting the two infinite orders: Research methods in translation studies. In T. Hermans (Ed.). *Crosscultural transgressions: Research models in translation studies II, Historical and ideological issues*. pp.9-25. Manchester: St Jerome.
- Vandeweghe, W., Vandepitte, S. & Van de Velde, M. (2007). *The study of language and translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 山口治彦 (2007). 「役割語の個性と普遍性」金水敏 (編) 『役割語研究の地平』(9-25頁). くろしお出版.
- 柳父章 (1982). 『翻訳語成立事情』岩波書店.
- 吉村公宏 (2002). 「プロトタイプ (prototype)」辻幸夫 (編) 『認知言語学キーワード事典』(224-225頁). 研究社.

巻末表

表 1 認知言語類型論から見た英語・日本語の相同性対照

相同性の項目	《Iモード》 日本語	《Dモード》 英語
a) 認知モード	状況密着型認知形態	認知主体外置型認知形態
b) 認知主体のあり方	感受者 (有情者) (sentient)	動作主 (agent)
c) 名詞のとらえ方	無界性 (unboundedness)	有界性 (boundedness)
d) 名詞のスキーマー	連続体スキーマー	個体スキーマー
e) 状況のとらえ方	「コト」「トコロ」的言語	「モノ」的言語
f) 1人称代名詞	多様	一定
g) 代名詞省略	多い	まれ
h) 非人称構文	あり	なし
i) 題目か主語か	題目優先	主語優先
j) R/Tかtr./lm.か	Reference point→Target	trajector→landmark
k) 動詞の焦点	行為中心	結果中心
l) 終わり志向性	なし	あり
m) 動詞のとらえ方	「なる」的言語	「する」的言語
n) 存在か所有か	BE言語	HAVE言語
o) アスペクト (進行形・「ている」)	始まり志向	終わり志向
p) 与格か間接目的語か	与格 (利害の与格)	間接目的語 (受け手)
q) (英語の) 中間構文	直接経験表現	特性記述表現
r) 間接受身	あり	なし
s) 動詞vs.衛星枠付け	動詞枠付け	衛星枠付け
t) 主観述語	あり	なし
u) 擬声語・擬態語	多い	少ない
v) 過去時物語中の現在時制	多い (e.g. 「る」形)	まれ
w) 直接・間接話法	ほぼ直接話法のみ	間接話法も発達
x) 話法の本質	共感話法	客観話法
y) 主体移動表現	通行可能経路のみ	通行不可能経路も可
z) 情況記述か行為記述か	情況論理性	行為論理性
その他の特徴	主観的把握, 共感的発想, 環境論的自己	

表 2 村上春樹・柴田元幸の競訳の事例 (1)

原文	村上訳	柴田訳
①He reached to the sofa for his jacket	彼はソファの方 ^に 手を延ばして上着を取り	男はソファに手をのぼして上着を取り上げ
②He put out <u>his hand</u> .	彼は <u>手</u> を差し出した。	そして <u>片手</u> を差し出した。
③He reached <u>a hand</u> to his forehead.	彼はおでこに <u>手</u> を当てた。	男は <u>片手</u> をおでこに持っていった。
④There was <u>a bed</u> , <u>a window</u> .	そこには <u>ベッド</u> が <u>一</u> つ <u>窓</u> が <u>一</u> つあった。	そっちには <u>ベッド</u> と、 <u>窓</u> がある。
⑤ <u>One pillow</u> , <u>one sheet</u> over the mattress.	マットレスにはシーツが掛かり、その上に枕が載っていた。	マットレスの上に <u>枕</u> がひとつ、 <u>シーツ</u> が一枚。
⑥I went to the kitchen and got <u>the chair</u> .	僕は台所に行って、 <u>椅子</u> を <u>一</u> つ持ってきた。	私は台所へ行って <u>椅子</u> を出してきた。

表3 村上春樹・柴田元幸の競訳の事例(2)

原文	村上訳	柴田訳
⑦porch	ポーチ	玄関先
⑧mailman	郵便配達夫	郵便屋
⑨Mr.Slater	スレーターさん	ミスター・スレイター
⑩Two-fifty-five South Sixth East	サウス・シックス・イーストの二五五番地	東六丁目南, 二五五番地
⑪a vacuum cleaner	電気掃除機	掃除機
⑫the plush carpeting and the luxurious reclining seats	エレガントな敷物やらゴージャスなリクライニング・シートやら	ビロードの敷物や豪華なリクライニングシート
⑬slipped the case from the pillow	枕のカバーを外し	枕からビローケースを外して
⑭opened the closet door	クローゼットの戸を開けた	押入れのドアを開けた
⑮a twelve-by-fifteen cotton carpet	縦横十二フィート, 十五フィートのコットンのカーペット	三×四メートルの綿のカーペット
⑯put another attachment on the hose	別のアタッチメントをホースにつけた	別の部品をホースにつけて
⑰looked closely at the return address	差出人のアドレスをしげしげと眺めた	差出人の住所氏名をしげしげと眺めた
⑱I just shampooed it.	今シャンプーしたばかりですからね。	洗浄したばかりですから。
⑲buckles	バックル	留め金
⑳free vaccuming and carpet shampoo	無料の掃除機サービスとカーペット・シャンプー	無料掃除機かけと, カーペット洗浄
㉑This little vacuum	この小さな真空掃除機	この小型掃除機
㉒sixty-foot	六十フィート	二十メートル